

# シンタローのヒーローアカデミア

こじろー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、作者しか得しない物語である！ヒロアカを読んでて耳郎さんが可愛い過ぎて暴走した結果。基本的に亀更新。ダブダブ駄文。こんなのシンタローじゃねえ！チートすぎだろ！っていうのが無理な人はブラウザバック推奨。なんなら無理じゃないよ！って人もブラウザバック推奨。

# 目次

シンタロー君についての設定	1
プロローグ	4
1話（よく分からない回）	8
2話	12
第5話	18

## シンタロー君についての設定

如月伸太郎（初登場12歳）

個性【メドウーサ】

全ての目の能力を有している。個性として確立した事により原作より強化されている。人型になる事も可能だがその場合人型になつて居る間その能力は使えなくなる。人型になつた能力はデメリットがなくなるがその分人型になれる時間が少なくなる。最大2時間は人型になれる。奥の手としてカゲロウデイズを使用可能。使用するとシンタローに触れている場合は大丈夫だが触れていないと永遠に死を体験する。シンタローに触れると終わる。シンタローは基本的に移動手段か荷物入れに使つて居る。

目を隠す：原作では体温は隠しきれなかったがこちらでは隠しきれぬ。また、隠せる範囲も半径が最大15メートル程に広がったが最大半径まで広がると見つかりやすくなる。人型の時の姿はキド。

目を盗む：相手の思考を読み取る事が出来る。原作では動物等の思考も読み取れたがこちらでは虫の思考も読み取る事が出来る。また長時間盗むと相手の記憶も見ることが出来る。こちらでは相手の直前の思考を盗む事が出来るようになった。代わりに余り使いすぎると激しい頭痛に襲われる。人型の姿はセト。

目を欺く：自分の姿を全く違うものに変える事が出来る。しかし、見た目しか変わってないので小動物とかになつても攻撃が当たる範囲などは変わらない。こちらでは違う人の見た目を変えることが可能になったが最大2人で他人の見た目を変えて居る間は自分の姿を変えることが出来ない。人型の姿はカノ。

目を合わせる（合体する）：目を合わせたものを石にする。石にしたものは自分の好きなタイミングで解除出来るようになった。しかし1度使用すると石にした人数にもよるが最大約1時間のインターバルを必要とする。人型の姿はマリー。

目を奪う：相手の視線を自分の方に強制的に集中させる。また別のものに集中させることも可能。こちらでは非生物に限り集中を最大

30秒付加させることが可能。最大5つに付加が可能。人型の姿はモモ。

目が覚める：どんな状態でも絶対に目が覚める。洗脳が効かなくなった。醒ますと併用するとエネのような電子生命体になる事が可能だがその間はパソコンの中に居なくてはならず敵に攻撃する事は不可能。基本的に常時発動している。常時発動のせいで人型になる事が不可能。

目を凝らす：人を見るとその人の持ち物が持ち物を見るとその持ち主が千里眼のように見える。最大範囲は大体10キロ。瞬きすると効果が切れる。一日に3回だけ数秒後の未来が見える。1回未来を見るのにかなりの体力を消耗する。人型の姿はヒビヤ。

目を醒ます：自分の体を理想の肉体に組み替える。基本手に常時発動していてその時はかすり傷程度ならすぐに治るくらいの回復力と5%フルカウル状態のデクと同等程度かそれ以下の身体能力がある。しかし、意識して発動すると馬鹿みたいな身体能力と再生能力が手に入る。その引き出せる力には限界はないが強化しすぎると一瞬でカローリを消費してしまい体がミイラのような状態になり動けなくなってしまう。コノハと同じ位の身体能力だと入学当時のシンタローでは30分位しか持たない。常時発動の為人型になる事は不可能。

目が冴える：使用するとどんなに混乱していても頭の中が急に冷めて冷静になれる。また思考能力もかなり上がる。あまり使い過ぎると脳が疲弊するので糖分を必要とする。人型の姿はクロハ

目をかける：自分の視界内の人最大5人に自分の思考を伝える。特にデメリットはないが制御に失敗すると自分の記憶も伝えてしまう。つまりカゲロウデイズ内での事が全て伝わってしまう。そうなる大体相手は情報量の多さから脳がオーバーヒートして廃人になるか沢山の死を経験した結果精神が壊れて廃人になってしまう。結局廃人になってしまう。人型の姿はアヤノ。

目に焼き付ける：1度見たものはどんなものだろうと忘れなくなる。本当に些細な情報も記憶してしまう為シンタロー以外が使うと

脳がパンクしてしまうのでやばい。瞬間記憶能力とは違い自分の前世の記憶とかも忘れられないので死んで次の体になっても記憶がある為へたしたら生まれ生きて数年で死ぬ可能性もあり。人型の姿はアヤノだが頬の所に鱗がついていて髪の毛は白い。

備考：カゲロウデイズを終わらした後にまたカゲロウデイズが暴走しないようにアザミから能力を全て譲り受けた。アザミから能力を譲り受けた後に別に引きこもらなくてもカゲロウデイズを操作する事が可能だと気付いた為別世界に飛んだ結果ヒロアカの世界にくる。ヒロアカの世界に飛んだら何故か若返っていた。一人暮らしで両親は無し、折寺中学に通に緑谷や爆豪と出会う。別に緑谷とかと仲が良い訳ではない、名前は知っている程度。いつも学年1位なので実は爆豪から目を付けられている事は知らない。中3は同じクラス。カゲロウデイズで起こったこと全てを記憶しているので精神年齢がヤバイ事になってる。先頭の時に時々相手の事を小童と呼ぶ事がある。ビビりはかなり改善したがそれでもまだホラー系は苦手だったりする。ヒロアカの世界に来てからすぐに作詞作曲を始めて、それを動画サイトに上げたら想像以上に人気になりすぐにCD化された。そのCDは自分で歌っていたりする。そしてCDが馬鹿みたいに売れた結果金がポンポン入ってくる為生活には困っていない。学校に行く時とかは基本的に自分が作った歌を聞いてメカクシ団と過ごした日々を思い返していたりする。クラスでも自分が作った歌が人気な為いつバレるかすごくドキドキしている。この秘密を知るのは耳郎だけである。中学の頃に耳郎が敵（ヴィラン）に襲われていた所を助けた事から知り合いになった。曲のボーカルはシンタローで楽器は耳郎一家がやっていたりする。

## プロローグ

シンタローのヒーローアカデミア

### 第1話

事の始まりは中国 軽慶市、 “発光する赤子” が生まれたという  
ニュースだった！

以降各地で「超常」は発見され、原因も判然としないまま時は流れる。

いつしか「超常」は「日常」に：「架空（ゆめ）」は「現実」に!!!  
世界総人口の約8割が何らかの “特異体質” である超人社会となった現在！混乱渦巻く世の中で！かつて誰もが空想し憧れた一つの職業が脚光を浴びていた！

シンタロー（以降シ）「それがヒーローって訳か：」

シ（ヒーロー：ねえ：確かに昔は少しだけ夢みた事はあったけど流石にこの歳だとなあ：でもそれがこの世界の常識か：てかヒーローが公務員ってどうなんだ？：）

「よし、調べものはこれぐらいにして飯でも食べに行くか。」

「はあ、案外腹いっぱいになったなあ。安い割には美味いからまた行くかな。……………ん？」

シンタローが “それ” に気付いたのは偶然だった。何が聞こえた様な気がしてふと路地裏を覗いたら見つけたのである。複数の敵（ヴィラン）に襲われている女の子の姿を。

シ「ッ!?クソッ!!」

その姿を見つけたシンタローは咄嗟に走った。

シ（クソッ！間に合うか!?俺が行った程度で何かが変わるわけじゃないだろうけど…………いや待てよ？アザミから【目の能力】を受け継いだんだ：なら！）

シ「【目を醒ます】!!」

そうシンタローが叫んだ瞬間目が熱くなり内側から組み替えられた様な感覚が全身を襲った。そして体の内側から力が湧いてくるの





耳郎「別に1人でも帰れるけど……まあ今みたいな事があつたばかりだからしょうがないね。それじゃ案内するからついてきて。」

「おう。」

耳郎 side

あの後ウチとシンタローがこつそり路地裏から出て色々話しながらウチの家に向かって歩いてた。

耳郎「へー、じゃあシンタローは今一人暮らしなんだ。」

シ「ああ、ちよつと前にこつちに来たんだ。まだ慣れないが案外楽しいな。」

耳郎「いいなー一人暮らし。ウチも憧れるわあ。あ、ここがウチの家だよ。」

シ「案外デカイな……んじやまあ家に着いた事だし俺は帰るわ。」

もう帰っちゃうのか……あつそういえば

耳郎「ちよつと待って。」

シ「ん？」

耳郎「今度お礼したいから連絡先教えてよ。」

シ「いや、お礼とかはいいよ。別にそういうの求めて助けた訳じゃないし。」

耳郎「いやいや、あそこでシンタローが助けてくれなかったらウチの貞操が奪われてたから。それにお礼しないとウチの気が済まないからさ。お願い。」

シ「………ハア、分かった。」

耳郎「ありがとう。それじゃこれ、ウチの番号とメールアドレスね。」

シ「ん。またお礼とか決まったら連絡してくれ。じゃあな。」

耳郎「分かった。ここまで付いてきてくれてありがとう、またね。」

さてと、取り敢えず家入ったら絶対オツサンがうるさいだろうなあ……しょうがないか。お風呂入りながらシンタローへのお礼考えよつ

と。

耳郎「ただいまー」

??????????

シntaxローside

ふう、やつと家に着いた。耳郎の家から案外遠かったな。作曲するのもいいけどその前にまずは「目の能力」についてだな。あの時咄嗟に「目を醒ます」を使ったけど特に問題はなかった…あの時の身体能力はコノハよりは低かったな。それに能力を解除した後どつと疲れが出てきた。つまり…

シ「目を醒ます」を使うと一気に体力が減るって訳か…これが使用時間に応じてなのか身体能力をどれくらい上げたか…もしくはその両方か…もし使用時間だったらあの短時間であそこまで疲れるとちよつとキツイな。これはトレーニングとかした方がいい気がするってきたな。こんな世界だからな…鍛えという損はなさそうだ。後は…他の能力にどんなデメリットが有るかだな。これものちのち実験していった方が良さそうだ。取り敢えずやる事は能力の限界を知る事と能力を発動した際のデメリットを知る事だな。後今後生きていく為の金なあ…通帳見た限りだと大丈夫そうだけどこれが今後増えなるとなると高校はバイトした方が良さそうだなあ…」

後は…知り合いが出来た事だな。繋がりは薄くても知り合いが出来たって事はいい事だ。別にお礼されるような事じゃないと思うんだけどなあ…つともうこんな時間か確か明日から学校だからな。早く風呂入って寝るか。

シntaxローside out

かくして少年は少女と出会った。この出会いがのちのち少年の運命を決める事となるのはまだ知らない。この物語は少年が少女や仲間達と共に最高のヒーローを目指して成長していく物語である

## 1話（よく分からない回）

シンタロー side

あれからの出来事を簡単に話そう。

まずは前の世界では二次オタクコミュ障ヒキニートだったせいでセロリレベルな足を持っていた俺が運動を始めた。最初の頃はそれともう酷かった。5分走るだけでぶっ倒れそうになったのだ。腕立て伏せも10回やっただけで筋肉痛になった位だ。それでも2年位続けていると案外体力は付くもので今では3時間位走っても軽く呼吸を乱す程度までは成長した。

後年齢的な問題で中学にも通う事となった。個人的にはめんどくさいがヒーローになる為にはヒーロー科がある高校を卒業するのが1番早いらしいのでちゃんと中学には通わないといけない。俺が通っている中学は折寺中学という所で耳郎とは別の中学だ。その事を耳郎に伝えた時はなんかしょぼんとしていた。昔のモモを思い出してつい頭を撫でようとしたが既のところ留まった。同年代の頭を撫でるのは流石におかしいからな。いや、俺既に数百年生きてるけど。

そしてさつきから話に出てきているからわかると思うが耳郎とは未だ交流が続いている。中学は違うが家はそう遠い訳ではないので時々放課後に遊んだりするのだ。後俺が作った曲を聞いてもらい感想を言ってもらったりしている。そして耳郎からの反応が特に良かったものはネットに上げているのだがこれが大当たりした。いやほんとマジでびっくりする位人気が出た。今ではCD化しているくらいである。

因みにCDにはボーカロイド版と普通の人がどうか俺が歌っている版と2つある。なんで俺が歌っているかと言うと簡単に言えば耳郎の両親のせいである。そもそもCD化の依頼をしてきたのが耳郎夫妻の所属する事務所。耳郎から親へ親から事務所へって形で俺の歌が知られていきその事務所の社長が気に入った結果CD化の話が来たのだ。その為何度か主に俺の収益に対する事についてで何

度か話をしに行つたのがその先で色々あつて何故か俺が歌う事となつた。まあ色々というか耳郎と一緒にカラオケ行つた時の俺の歌声の録音を耳郎夫妻に聞かせたからなんだけどな。

そして俺の歌Ver.の方も案外売れてるしボーカロイド版の方もかなり売れているおかげで俺の貯蓄は当面の間は困らない位貯まった。元から無駄遣いしなければ成人を超えるまでの生活費はあつたんだがこの収益のおかげで毎日外食しても問題ないくらいまで貯金が貯まった。

さて、過去の事はこれくらいにして今の事を話そう。俺は中学三年生となつている。中三となつた俺がいるクラスにはうちの学校で有名な2人がいた。

1人は爆豪勝己。個性【爆破】という強個性を持ち運動、勉強共にトップレベルな才能マンだ、でも結構みみっちい性格をしている。それにヒーロー志望なのに口癖が「死ねえ！」や「くたばれ！」等ヒーローと思えない様な暴言を吐いている。まあ周りの話を聞く限り小さい頃からちやほやされていたらしいからな、自分が1番でも思っているのだろう。勉強では俺に負けているが。

そしてもう1人が緑谷出久。総人口の約80%が個性を持つ中でも珍しい「無個性」だ。無個性である事から周りから見下されてお友達もいないらしい。そしてさっき紹介した爆豪からはじめを受けているらしい。おいなにやってるんだヒーロー志望。

緑谷は重度なヒーローオタクで普段からヒーロー考察ノートを持って暇な時間にはヒーローの能力について考察をしている。

どんな事が書いてあるか気になるが別に聞きに行く程ではない。それにああいうタイプは自分の興味がある事だと話が長くなるタイプだし。マリーがそうだった、しかもBLについてだったからあれはキツかった。なんで俺やセト、カノの同人誌があつたんだろうなあ(遠い目)。

そんな緑谷だが数ヶ月前から変わった。前まで普通に授業を受けていたが今では死にそうな雰囲気を受けている。時々めっちゃブツブツ呟いてるし。まあそんな緑谷を気にならない訳がなくて前に

ちよつと【盗む】を使って記憶を見てみたらなんか骸骨みたいなオツサンと特訓している風景が見えた。そのオツサンがどんな人かは知らないがどうやら緑谷は体を鍛え始めたらしい。そう言えば緑谷も爆豪と同じで雄英志望だったな、こいつ本当にヒーロー科を受けるつもりか。まあこいつが落ちようが受かろうが俺には関係ないな。精々応援でもしとくか。

さて高校受験まで後1ヶ月といった所だ。普通の人ならここから受験の為に色々勉強するんだろうが俺にはそんなの必要ない。という事で今日も放課後は筋トレをする予定だ。ヒーロー科を受験するなら体力や筋力は必須だからな。そして俺の受験する高校なんだが実は俺も雄英高校なのである。これは耳郎が

「ヒーローになりたいんだっいたらやっぱり雄英高校でしょ。あそこは設備も一流だし先生も全員プロヒーローだし。ヒーローとして有名になりたいなら一番は雄英だよ。」

と言っていたからである。まあ確かに雄英はあの『平和の象徴』と呼ばれるオールマイトの母校である事からかなりの人気を誇る。それにあそこの体育祭は今では日本の一大ビッグイベントだしな。という事で俺は雄英高校を受験する事にした。まあそれが学校でバレた時はめんどくさかったんだけどな。同じクラスである爆豪が箔をつけたいとかなんとかで受けるのをやめるとか言ってきたからである。耳郎も雄英を受けるらしいので一緒に入学しようと約束していた俺は当然それを拒否。そしたら爆豪が俺に襲いかかろうとしてきたのだ。しかしその後担任が緑谷も雄英を受ける事を暴露。爆豪の標的が俺から緑谷に変わった事により事なきを得たのである。

そんな過去の事は置いておいて今の事である、ってこれ何回言ったかな？

最近の俺は放課後に耳郎とトレーニングをするか耳郎に勉強を教えるかの二択だ。トレーニングは公園とかでしてその後ファミレスとかで夕飯を食べるのが一連の流れである。勉強を教える場合は学校が終わったら耳郎との待ち合わせ場所まで行った後に耳郎の家で勉強をしている。初めて行った時はめっちゃ緊張したけどもう慣れ

た。勉強の後はそのまま耳郎の家で夕飯を一緒に食べさせてもらっている。自炊はしない事はないけど正直めんどくさいのである。

今の所はそんな感じだな。他には特に何も無かったただトレーニングを繰り返してた日々だからなあ。多分次は入学してからだと思う。正直入試とか俺の活躍はそう無いだろうし。(メタ発言)

まあ今回はこれまでの振り返り回だと思ってくれ。文句は俺じゃなくて作者へどうぞ。

## 2話

### 第2話

シンタローside

どうも皆さんこんばんわ、如月伸太郎だ。

今俺の目の前には雄英から届いた合否通知がある。正直受かってる自信はある。筆記の方はどうせ満点だし実技の方も42ポイント位手に入れていたから問題ないだろう。それに多分あの試験は敵を倒す以外にも貰えるポイントがあると俺は思っている。だってヒーローって敵を倒すだけじゃなくて困ってる人を助ける職業だからな。それなのに敵を倒すだけでしかポイントが貰えないのはおかしいだろう。まあそんな事は置いといて早速開封しますか。

「さてと、中身はっと、ん？何だこの円盤状の物。あ、なんかスイッチがある。」

ポチツとな

『私がアア！投影されたアア!!』

「フア!?オールマイト!?え、なんで!？」

『やあ、如月少年！今頃私が投影されて驚いている事だろう!!何故私が投影されたかって?それは私がこの春から母校である雄英高校で教師を勤めることになったからさ!!』

えっ!?マジで!?あの「平和の象徴」であるオールマイトが教師に  
なんの!？」

『さて、色々時間が足りなくてね早速だが合否発表と行こうじゃないか!』

あ、オールマイトのインパクトが強すぎて忘れてた。

『さて、如月少年！率直に言おう！君は合格だ!』

おお、めっちゃ簡単に言われた。俺のドキドキを返せ。

『順番に説明していこう。まずは筆記試験！これは前代未聞の満点だった!!雄英高校始まって以来初となる歴史的快挙だ!!』

まあそれは分かった。

『そして次に実技試験だが実は今年は優秀な子が多くてね！君の敵ポ

イントだけじゃ足りなかったんだよ。でも我々教師が見ていたのは敵ポイントだけではない！その名も救助ポイント！天才的な頭脳を持つている君なら気付いていたかもしれないけどね！君は仮装敵を倒しながらも困ってる受験生を何人か助けていた！よって君に24ポイント加算された！これにより君のポイントは合計で67ポイント！無事合格ラインを超えたわけだ！』

あ、俺が倒した仮装敵だけじゃ足りなかったのか…危なかったあ。確かに気付いてたけど本当にあるかは不安だったんだ。まあ無事受かって良かった。

『さて、これで発表は終わりだ！如月少年！ここが君のヒーローアカデミアだ！高校で待ってるぜ！』

あ、終わった。無事合格かく良かったあ。そう言えば耳郎の方はどうだったかな？LINEして見るか。

『耳郎く合否通知来てた？』

耳郎ならすぐに返信が『ピロン』いやはええよ

『ウチは来てたよ。シントローは？』

『俺も来てたぞ。それで、結果はどうだった？俺は合格だったけど。』

『ウチも合格してたよ。それで今ウチの親は大騒ぎしてる。』

ああ…響徳さんが騒いでるのが目に浮かんで見えるわ。

『そうか。合格おめでとう。』

『そつちこそ合格おめでとう。あ、そうだ今日うちで合格記念パーティーやるらしいけどシントローも来る？』

『いや、流石にそこは家族だけでやった方がいいんじゃないか？』

『ウチは別に大丈夫だし親も来ていいって言ってるから問題ないでしょ。』

『そうか…ならお邪魔させてもらうわ。』

『OK、じゃあまた夜にね。』

『おう。』

さてと、時間までに一緒に届いてた資料に目を通しておくか…

く入学式当日く



はい、という事で入学式当日です。え、時間が飛びすぎだつて？  
だって特に話す事なかったし強いて言うならまた爆豪が絡んできた  
のと担任がめっちゃ嬉しそうにしてた位だし…

「シントロー、何ブツブツ言ってるの？緊張でもしてるの？」

「ああ、悪い耳郎。緊張は…まあしてるっちゃしてるな。」

「え、あのシントローが緊張？」

「うるさい、俺は元々コミュ障なんだ。」

「ああ、確かに。初めてウチの家に来た時の噛み具合と言ったらもう  
…クククク」

「う、うるせえ。いいから行くぞ。取り敢えず俺達のクラス割りを見  
に行くぞ。」

「クククク…わ、分かった…クククク」プルプル

「いやいつまで笑ってんだよ！はあ…」

〜教室前〜

「うわあ…でけえな扉。」

「でつかいね…バリアフリーなのかな？」

「多分そうじゃね？まあそんな事はどうでもいいから教室入るか。」

「だね。めんどくさい人とか居ないといいけど。」

「ヒーロー科だから流石にいないだろ…いやー人心当たりあるわ」

そう言えばさつき見たクラス割りに爆豪の名前が入ってた気がする  
るんだよなあ。めんどくせえ

「ん？シントローなんか言った？」

「いやなんでもねえよ。」

既に来ているのは半分位か…爆豪と緑谷はまだ来てないみたいだ  
な。緑谷はともかく爆豪がいなくて良かったあ。

「さて俺の席はどこだろ。」

「この紙に書いてあるよ。シントローは…真ん中らへんだね。」

まじかア…窓際の方が好きなんだけどなあ。授業はどうせ聞かな  
くても分かるからなあ…流石に寝るのは先生からの印象も悪くなる  
だろうし…大人しく受けるか…めんどくせえ

「真ん中かあ…耳郎はどこなんだ？」

「ウチ？ウチは…あ、シンタローの隣だ。」

「へー、これはラツキーと言うべきかどうか分からんけど知り合いが近いのは楽でいいな。」

「そうだね。授業中わかんない所あったら聞けるし」

そんなこんなで席に座って耳郎と話しながら待っていたら

ガラツ

お、爆豪だ。爆豪は…窓際の1番前か。すこし距離があるから絡まれずに済むだろう。てかあいつの座り方完全に不良じゃねえか。机の上に足置くなよ…あ、誰か爆豪に向かっていったな。あれは…確か入試の時プレゼントマイクに質問してたやつだな。

「机に足をかけるな！雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないのか!?!」

「思わねーよてめーどこ中だよ端役が!」

「ボ…俺は私立聡明中学出身の飯田天哉だ。」

「聡明くくく!?!くそエリートじゃねえかぶっ殺し甲斐がありそうだな!」

「ブツコロシガイ!?!君ひどいな本当にヒーロー志望か!?!」

おお、爆豪は今日も通常運転だな…

「ねえシンタロー…あの敵っぽい言動してるのがシンタローが言っていた爆豪ってやつ?」

「ああ、大体の事はなんでも出来るやつだが昔からちやほやされて生きてきたせいかなんな感じになってる。俺が中学で知った時から大体あんな感じだ。」

「へー…あんなんで本当にヒーローになれるのかな…?」

「あのまま変わらなければ多分なれないだろうな。卒業までもっと丸くなつてれば多分なれると思うけど…」

「丸くなる…ねえ。ウチには想像出来ないんだけど…」

「俺も」

「おい…その蛇野郎と耳女!聞こえてるぞ!!」

まあ俺は聞こえるように喋ってたしな。

「うるさいぞ。お友達ごっこがしたいなら他所へ行け」



「67m」

「じゃあ『個性』を使ってやってみろ。円から出なきや何してもいい、早よ。思いつきりな」

「んじやまあ…死ねえ!!」

(((((…死ね?))))))

てか爆風ヤバいな、目に砂が入りそうだ。

「まずは自分の「最大限」を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

「なんだこれすげー」面白そう!!」

「705mってマジかよ!」

「『個性』思いつきり使えるんだ!!流石ヒーロー科!!」

自分の最大限…か。正直【醒める】がどの位の出力出せるか分からないんだよなあ。一応個性登録では身体能力を変化させる個性って言っているから大丈夫だけど…それに出力上げるとその分疲労が溜まりやすいし…普段の訓練はコノハを100%とすると疲労が余り貯まらない5%でしてるからなあ…とりあえず50m走とソフトボール投げは50位出して他は普段通りでいいだろう。

…ん?なんか先生の雰囲気が変わって…

「『面白そう』…か。ヒーローになる為の3年間、そんな腹づもりで過ごす気でののかい?」

よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し【除籍処分】としよう」

「『はあああ!?!』」

おおマジか!?!そんな事もするのか雄英は!?!

「生徒の如何は先生の『自由』!」

ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ。」

## 第5話

### 第3話

皆さんこんにちわ如月伸太郎だ。

今日は本当なら雄英高校の入学式だったんだが担任である相澤先生の判断により入学式をサボって個性把握テストという名の体力テストを受けることになった。

そして今は第1種目の50m走だ。

「シntaxロー？次はアンタの番でしょ？なにしてんの？」

「ああ、ちよつと考え事をした。サンキュー」

もう俺の番だったか。一緒に走るヤツは…

「おう！俺の名前は切島鋭児郎っていうんだ！よろしくな！」

なんかすげえ髪型してるこいつか…

「俺は如月伸太郎だ。よろしく。」

「おう！お互い除籍されないように頑張ろうぜ！」

…髪型に反してめちやくちや良い奴だなこいつ。いや、じゃないとヒーローになんてなれないか…爆豪？知らない子ですね

「そんじゃあ位置についてよーい」

そんじゃあ出力を50%位にして

「ドン」

走る！つてちよ！？予想以上に速いんだが！？

『0秒54』

うおおおお！？これキッツ！？今の俺じゃ一直線にしか走れんぞ！？今回みたいなの時ならまだしも実戦じゃ使えんなこれ…ちやんと制御出来るようにならなきゃ。

てか50でこれなら100はどんだけなんだよ…コノハつて凄かったんだな

「うおお！！凄いなお前！！身体強化系の個性か！」

「ん？ああ、身体能力を変化させる個性だ。変化させる上限は特にはないと思う。」

「マジか！？めつちや強え個性じゃん！！」

「一応デメリットとしては変化させた分だけ体力を消費する事だな。今出した位の出力だと多分1時間も持たない。あんまり体力を消費すると多分死んじゃうしな」

「うおお…中々なデメリットだなそれは。」

「まあ、普段は今の10分の1位しか使ってなかったせいで制御出来てなかったんだけどな」

「そうか…お前漢だな！次も頑張ろうぜ！」

……今の会話の何処を聞いたら漢って判断が出てくるだろう？

まあそつから先はダイジェストで行こう

第2種目：握力

特に特別な事はなかった。5%の力でやったら中学時代が32<sup>キ</sup>だったのに対し82<sup>キ</sup>と2倍以上になっただけだ。何やらあつちの方では540<sup>キ</sup>出してるやつもいたようだが…

第3種目：立ち幅跳び

これも5%でやった結果5mちよいまでいけた。爆豪は両手から爆破してその推進力で飛んでたけど

第4種目：反復横跳び

これも特に何も無かった。

第5種目：ボール投げ

ここでは50%で投げたら800mを超えた。やべーなこれ。しかも爆豪がめっちゃ睨んでくるし

「やるじゃんシンタロー」

「まあ、俺の個性にはうってつけだったしな」

「ウチはなあ…この個性だどうやっていい結果出せばいいのかわかんないんだよね」

「長座体前屈の時に耳を最大まで伸ばせば？」

「あ、その手があったか」

暇だから耳郎と喋っていると緑谷の番が回ってきた

「さて、あいつは入試直前に個性が発現したって聞いたがどんな個性なんやら。結局さっきの試験の時も使ってなかったし」

「え、そんな事って有り得るの？個性の発現って4歳までじゃないの

「？」

「俺はそんな詳しく知らないからなんとも言えないけど有り得ない話じゃないだろ。あまりに危険な個性だったから脳が無意識の内にもミッターをかけてたっていう可能性だってあるんだし」

まあもし本当に脳がリミッターをかけていたならその個性はかなりヤバいんだろうな。お、緑谷が振りかぶって…なんか緑谷の腕発光してね？目に見えるくらいのエネルギーが腕に集まるとかヤバくね？あ、消えた。不発…？いや、まるで突然消された様な…

「“個性”を消した。」

個性を消した…だと？

「つくづくあの入試は…合理性に欠くよ。お前の様な奴も入学出来てしまう」

「消した…!!あのゴーグル…そうか!!見ただけで人の個性を抹消する【個性】!!抹消ヒーローレイザー・ヘッド!!」

個性を消す個性もいるのか!?

「見たところ…個性を制御出来ないんだろ？また行動不能になって誰かに助けてもらうつもりだったか？」

「そっそんなつもりじゃ…!?!」

「どういうつもりでも周りはそうせざるえなくなるって話だ」

確かにあの先生の言う事は正しいな…1回使ったらその後お荷物になるとか話にならないし

「個性は戻した…ボール投げは2回だ。とつとと済ませな」

「あいつ…どうなるんだろ？」

「さあな。ここで打開策を見つけないとあいつは除籍されるだろう。」

さあて、どう出る緑谷？お、振りかぶって…さっき見えていたエネルギーが見えないって事は諦めたか…？いや、あれは…人差し指に集まって…!?!おいおい…マジかエネルギーを人差し指だけに集中させたのか…

「やるなあ緑谷。ちょっと見直したわ。」

「でもあいつの指すごく腫れてるよ。」

「多分個性の力が強すぎたんだろ。あの超パワーに体が追いついてな

いんだ。」

でもあれは本当にあいつの個性なのか？なんか違和感を感じるんだよなあ。俺もそうだから分かるんだけどあいつの中に何人か人がいる感じがする。…ん？

「どーいうことだこら!!ワケを言えデクてめえ!!」

「うわあああ?!?!」

はあ…

「【目を奪う】(ボソツ)」

「ピクツ

「デクう…!?!」カクン

「【目を合わせる】(ボソツ)」

「なっ…」

目を奪うでこつちを向かせて一瞬だけ目を合わせるで止めれば後は先生が止めてくれるでしょ

「んぐえ!?!」

流石プロヒーロー

「ぐっ…んだこの布!?!固っ…!!」

「炭素繊維に特殊合金の鋼線を編み込んだ『捕縛武器』だ。まったく何度も個性を使わずなよ、俺はドライアイなんだ!」

((((個性凄いのにもったいない!!)))

「時間がもったいない。次、準備しろ」

その後は特に何もなく終わった。まあ強いて言うならいくら自分が作ったからって持久走で乗り物ってあり?って思ったくらいだ。

「んじやパパっと結果発表。トータルは単純に各種目の評点を合計した数だ。口頭で説明すんのは時間の無駄なので一括開示する。ちなみに…除籍はウソな。」

「…!!?!」

「君らの最大限を引き出す合理的虚偽」

「…!!?!」

「あんなのウソに決まってるじゃない…ちよつと考えればわかりますわ」





「ありがとうございます。えっとそれでなんですが条件というのは……」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

はい、という事でやって来ました校長室。

俺が付けた条件っていうのが校長とオールマイトにも聞いておいて欲しいという事だ。まあ俺の力はこの世界だと異端にも程があるからな。いざという時の味方を増やす為に校長やオールマイトにも聞いておいてもらおうと思っとな。

「失礼します。相澤と如月です。」

「失礼します。」

そしてそこに居たのは…

「ネズミ?」

「やあ、よく来たね!僕がこの雄英高校の校長である根津だよ!よろしくね!」

「は、はあ。よ、よろしくお願いします。」

え、雄英の校長ってネズミなの!?

「根津校長は今の所唯一確認されてる個性が発現した動物だ。個性

【ハイスペック】人間を超越した頭脳の持ち主だ。」

「まあ、多分如月君は僕と同等レベルの頭脳を持つてると思ってるけどね!さて、それで今回の話は君の個性についてだったね?」

「はい、ってあれ?オールマイトは?」

「ああ、彼ならもうすぐ来るよ!」

ガチャ

「すみませんお待たせしました!」

「いいよ。それじゃあ如月くん。話してくれるかな?」

「はい。」

取り敢えず個性についてだけ話せばいいか

「まず最初に俺の個性は1つしかありません。」

「1つだど?だがあの時身体能力を変化させる個性と爆豪の注目を集めた個性、爆豪の動きを止めた個性の最低でも3つはある筈だ。」

「いえ、その3つともとある1つの個性の力なんです。」

「それで、その個性と言うのは？」

「はい、俺はこの個性を【メデューサ】と呼んでいます。」

「メデューサ」。確かギリシア神話に出てくる蛇の化け物だったな、見た物を石に変えるとかいう。」

「はい。しかし俺の言ってる【メデューサ】と神話のメデューサは違うものです。」

「違う…だって？　どういう事だい如月少年。」

「まず俺には合計で11個の力があります。」

「11個…だと!？」

「はい。姿を隠す能力の【目を隠す】、相手の思考を読み取る【目を盗む】、自分の見た目を変える【目を欺く】、自分と目を合わせたものを石に変える【目を合わせる】、自分に視線を集中させる【目を奪う】、どんな状態からでも目を覚まさせる【目が覚める】、遠くのものを見るこゝとが出来【目を凝らす】、自分の肉体を理想の物に変える【目を醒ます】、自分の思ってる事を相手に伝える【目をかける】、見た物を全て記憶する【目に焼き付ける】、後は説明がしづらいんですけど【目が冴える】っていうのもあります。」

「……………なるほど。個性把握テストで使っていたのが【目を醒ます】で爆豪の時に使っていたのが【目を奪う】と【目を合わせる】か。」

「はい。」

「しかし如月少年。何故こんな数の個性を持っているんだ？」

「…この個性は元々は俺の個性じゃありません。俺はこの内の【目に焼き付ける】しか持っていませんでした。他の個性もそれぞれ一人一つずつ持っていました。」

「なに!?!それは一体どういう…」

「そうですね。あまり驚かないで聞いて欲しいんですけど…いや多分無理だと思いますけど」

「いいよ、話したまえ如月くん。」

「分かりました。それじゃあ簡潔に言いますね。俺と元々この個性を持っていた他の10人は1度死んでいるんです。」

「なっ!?!」

「死んでいる…だと!？」

「はい。そしてその後はこの個性を貰ってから生き返ってるんです。」

「貰った…だと? 一体誰から」

「それがさつき出てきたメデューサです。とある日に2人が同時に死ぬとあるものに吸い込まれるんです。」

「あるもの?」

「はい。俺達はそれを「カゲロウデイズ」と呼んでいました。」

「【カゲロウデイズ】…俺は聞いた事ありませんね。オールマイトさんは?」

「私も聞いた事ないね。校長はどうですか?」

「いや、僕も聞いた事ないよ。それでその【カゲロウデイズ】に吸い込まれるとどうなるんだい?」

「カゲロウデイズに吸い込まれると死んだどちらかはカゲロウデイズ内に取り残されてもう片方は外にはじき出されるんです。はじき出す時に能力を植え付けてから。」

「その能力が…」

「はい。さつき教えた俺の力です。」

「そうか…」

「如月少年、カゲロウデイズというのは一体なんなんだね?」

「カゲロウデイズは簡単に言うと【終わらない世界】です。」

「終わらない世界?」

「はい。元々カゲロウデイズはメデューサが創り出したものなんです。」

「なに!？」

「創り出しただと!？」

「はい。彼女は不老不死でした。彼女は周りから化け物と呼ばれていました。しかしそんな彼女にも愛する人がいたんです。でも、その人は普通の人間でした。なので彼女と違いどんどん歳を老いていきます。その事に耐えられなくなった彼女が作ったのが【終わらない世界】つまり、カゲロウデイズです」

「なるほど…そんな事が…」

「しかし、その人はカゲロウデイズが出来上がる前に死んでしまうんです。その事を知った彼女は一人カゲロウデイズに閉じこもりました。」

「……」

「そして彼女が閉じこもっている間にカゲロウデイズが暴走を始めてしまったんです」

「……それが決まった日時に2人が同時に死ぬと吸い込むっていうやつか?」

「そうです。」

「なるほど…それで如月くん。そのカゲロウデイズは今はどうなったんだい?」

「ああ、今は俺が管理してます。」

「なっ!?!」

「それは本当か如月少年!?!」

「はい。まあ特に何に使うわけでもありませんが。強いて言うなら移動手段や荷物入れですかね?」

「へ?」

「俺がカゲロウデイズを管理してるので俺は特に影響を受けないんですよ。まあ俺以外の人だとやばいですけど。」

「……因みにそのカゲロウデイズは具体的にどんな事が起こるんだい?」

「そうですね…俺以外の人が入ると死にます。」

「死ぬ!?!」

「はい。いや、まあ簡単に言うと死んで生き返つてを繰り返すんです。終わらない世界ですから。」

「なっ……」

「カゲロウデイズ内でしか死なないので外に出したりすれば生きてますが多分精神は壊れるでしょうね。」

「なんと恐ろしい……」

「……如月くん。君は今〃何歳〃だい?」

「校長?」

「へっ？16歳ですけど…」

「質問の仕方が悪かったね。君は一体何回死んだんだい？」

「!?え、なんでそこに気づくのこの人(?)!?」

「…どういう意味ですか校長？」

「いやね相澤くん。さつきから話を聞いてると彼もカゲロウデイズに吸い込まれてるじゃないか。そしてカゲロウデイズは入ると何度も死ぬとも言っていた。なら彼も何度も死んでいるという訳だ。」

「…はあ。校長の個性を甘く見てました。そうですね。俺は何度も死んでます。何千、何万ともしかしたら億もいつてるかもしれないですけど正確な数字を数えるのは途中でやめたので。」

「……なに？」

「それは…」

「それはカゲロウデイズに吸い込まれた人全員が覚えるのかい？それとも君だけが？」

「俺ともう1人ですね。まあそいつももういませんが。俺は【目に焼き付ける】の効果で全て覚えてるんです。自分が今までどれだけ死んだか。」

「なんと…」

「(こいつ…)」

「あ、それと今の俺はメデューサそのものになってるので俺も不老不死になってるんですよ。」

「……なんかもう驚き疲れましたよ…」

「……私もだよ相澤くん。」

「まあ、それが当たり前の反応ですよね。」

そりゃあ生徒の一人が不老不死で尚且つ精神的に年上でしかも何度も死んでるって聞いたならそんな反応になるよな。俺が逆の立場なら絶対そうなる自信あるし

「話してくれてありがとう如月くん。」

「いえ、それで相談なんですけど」

「なんだい？」

「俺の個性は登録し直した方がいいんですかね？多分これから先使う

事が多くなると思うんですけど」

「ならそこら辺は僕が手を回しておくよ。こう見えても権力はあるからね！」

「ありがとうございます。」

「良かった…まあ後の問題はクラスメイトとかだけで」

「如月。」

「はい。」

「その個性【目を醒ます】だったか？以外はあまり使うなよ。危ない時なら使ってもいいが今日の爆豪の時とかは俺が対処するから」

「あ、分かりました。」

「よし、それじゃあもう帰っていいぞ。時間取らせて悪かったな。」

「いえ、俺も話せて良かったと思っただけ。それでは失礼します。」

ふう、やっと終わった。あ、そう言えばオールマイトに聞きたいことあったけど…まあいいか。

明日から一体どんな授業が始まるのかちよつと楽しみだ